

第16回三番瀬再生実現化試験計画等検討委員会の開催結果（概要）

- 1 開催日時 平成22年11月22日（月）午後6時00分から7時40分まで
- 2 場 所 千葉県国際総合水泳場会議室
- 3 出席者 委員13名
(欠席委員：4名 横山委員、中山委員、上野委員、清野委員)
- 4 参加人数 32名

5 結果概要

(1) あいさつ

倉阪委員長からあいさつがあった。

(2) 開催結果の確認委員

委員長からの指名により、中島委員と赤塚委員が会議開催結果の確認を行うこととなった。

(3) 議 事

議題1 第15回検討委員会の開催結果概要

事務局から資料1により、第15回検討委員会の概要について説明があった。

(主な意見等)

- ・ 特になし

議題2 平成22年度三番瀬再生実現化試験事業（干潟的環境形成試験）の実施状況について

事務局から、資料2により、平成22年度の三番瀬再生実現化試験事業（干潟的環境形成試験）の実施状況についての説明があり、検討、質疑応答が行われた。

(主な意見等)

- ・ 波高計を設置したところの位置が非常に重要な情報になるので、資料の中に確実に落としてほしい。
- ・ 水深の3分の1近くの波高が出ているというのは、かなり厳しい状況の波が起こっているという経験をこの砂山が受けたということだと思う。その中で、少しずつ山が削れてはいるが、何とか残ったというようなところで、砂洲として安定できる可能性が残ってきたのかと思う。短期的になくなってしまふことはなかったという

のは、一つの成果ではないか。

- 粒度分布の結果から、置いた砂が取られるばかりではなくて、その場の元の底質と混ざっているか沈んだか、少し根を張るように砂山が安定している様子を示しているのではないか。
- 地盤高調査の断面図（図6）について、在来地盤（最初の試験をする前の地盤）のラインが入っているとわかりやすい。
- ゴカイ類は昔からいたようなゴカイか。そして、これが増えることによって干潟が良くなっているのか。
- 特に今回多かったコケゴカイ、これは泥が多いところによくいるゴカイで、新しい環境ができると比較的早く入ってくる。これが多いというのは、まず環境変化に対して真っ当な反応が起こっているということだと思う。

ミズヒキゴカイが入っているが、これはエラをたくさん外へ房のように出して、水中の懸濁物なども餌にするゴカイであるので、こういう種類がいると、水中の濁りを取り込んでいくので、浄化の面でも少し役立つかと思われる。

本当に貧酸素化してしまって厳しい状況になるとツバネスピオという種類のスピオが出てくるが、それが出てきていないので、まだ貧酸素の状況としては厳しくないかと思われる。

汚濁指標種というものがあまり多く出てきていないように見える。今までのところ、環境がいいところに入ってくるものの代表種が大いに出てきているのではないか。

また、もう少し大型のヤマトカワゴカイのようなものが増えてくると、ハゼの餌とか、少し大型の魚の餌にもなるのもっと良いかと思うが、それはまだ見えていないというような状況かと思われる。

- 試験区と対照区と見ると、試験区だけで出てきているものとして、ホンビノスガイ、アサリ、こういったところが特徴的かなと思われる。これらの出現は「三番瀬の再生」という観点から言うと望ましい種なのではないか。（委員長）
- 塩浜2丁目の前面あたりはあまり強く青潮が回ってこなかったもので、その影響もあったとは思いますが、砂を入れたことであれだけ生物がつくということはいいことではないか。
- 隅角部の砂つけ試験に比べ、周囲を全く囲っていないので青潮に対して影響を受けやすいかと思っただが、青潮の後もかなり生物が入ってきており、いい傾向であると思われる。（委員長）
- 3回の青潮があった後の10月22日の試験区と対照区の個体数と湿重量のデータを見ると、著しく大きな差は見られないように思う。青潮の中でも在来の対照区でよく頑張っていると感じた。
- 27 m³の砂の量が、この2ヵ月程度の間でどの程度残ったのか。
- 砂がどこに行ったかということについては、測線5や13といった一番端のとこ

ろに大きな変化がないことから、若干陸側に全体として移動しながら、安定的に堆積しているのではないかと思われる。

投入後すぐはかなり流出したが、その後は安定的に推移しており、砂洲として安定できる可能性が見えているのではないか。ただ、台風のようなものの直撃があったときに一気になくなるようなことはあり得ると思う。(委員長)

- どのくらい砂が残ったか、あるいはどこへ行ったかということと関連があるが、在来地盤を大ざっぱに推定して、ボリュームを計算してみたらどうか。
- 砂を置いたことにより、ゴカイなどの生物の上下の動きがもしあると、上の土と下の土が混合する一つの原動力になるのではないかという気がする。
- これは小規模試験であるから、もう少し大掛りにやらないとわからないこともあり、そここのところも検討していただきたい。

【委員長のまとめ】

- これまでの調査の結果、少なくとも、砂はすぐには無くなってしまわないということは分かった。
- 対照区と比較して明らかに試験区だけ入ってくる生物、特にアサリ、ホンビノスガイなど三番瀬再生にとって鍵となる生物が試験区に見られるということがこれまでの段階の調査では分かった。
- この調査の結果を踏まえて次のステップを考えるということは当然必要であるが、その際の評価として、生物相については、もう少し継続して調査をしていく必要がある。

議題3 平成23年度三番瀬再生実現化試験事業（干潟的環境形成試験）におけるモニタリング計画について

事務局から、資料3により、平成23年度の三番瀬再生実現化試験事業（干潟的環境形成試験）におけるモニタリング計画についての説明があり、検討、質疑応答が行われた。

(主な意見等)

- モニタリング調査が行われる前後での台風なり出水等が大きな問題になると思う。また、暗渠のほうから流れ出てくる砂の調査も一度やっていただいたらどうか。さらに、環境省の谷津干潟の調査結果によると、30年間に谷津干潟の砂が10トントラックで3,000台のものが流出しているという調査が発表されている。ついては、これは江戸川放水路からの流出の問題とあわせて考慮すべき要素ではないか。
- 台風時であったり、大規模な青潮の発生時、それがどういうふうに影響するのかというような緊急に確認するようなものはあったほうが良いと思う。

これはそこで詳細な調査をやれということではなくて、それが本当に影響しているのかどうか、台風の後ちょっと見に行って、残っているかどうかぐらいは確認をするとか、そういったことをご検討願いたい。(委員長)

- ・ 潮位変動が谷津干潟からの土砂の流出にどう関係しているかということについてであるが、谷津干潟から出入りする暗渠の断面が不足しており、干潮時に暗渠のところでの流速が非常に速くなっている。それが主な原因となって、かなり流出しているということを調査したときに感じており、その結果ではないかと思われる。
- ・ 谷津干潟、それから行徳湿地からの土砂の流出についても、全体として環境変化を把握したほうがいいといったサジェスションであるが、それについてどういうスキームで行うかということについては、県のほうで、この実現化試験のモニタリングとは切り離して考慮していただきたい。(委員長)
- ・ スタートの時点で生物がついたという結果が出ているので、3ヵ月ごとということにこだわらなくてもいいのではないかと。例えば、6月の調査を少し遅くして、夏前の貧酸素や台風が来ていないときに調査を行う。9月の調査は、仮に1回でも台風が来るか貧酸素が来るか、イベントが起こったら次の2回目の調査を行う。3回目は、台風が先に来れば今度は貧酸素が起こったときというように、イベント時の調査として9月と12月分を確保しておいて、3月は次の年度に引き継ぐという意味で、3月のまま1回残しておくということでも良いのではないかと。
- ・ もともとの地盤と同じ砂で、これくらいの高さの場所ではどんな生き物が棲んでいるのかという情報を集められるように努力をしていただきたい。
- ・ 水温、pH、DOが相関があるのかどうか、もしあるとすれば、暑いときとかそういう変化のありそうなときというのは見ておく必要があるのではないかと。
- ・ DOが14というのは過飽和である。これは明らかに、植物プランクトンが大量に発生している状況を現しているのではないかとと思われる。植物プランクトン大量発生の状況というのはpHにも関係し、pHが高くなる。したがって、DOとpHのよく似た線というのは、いわゆる赤潮に近い植物プランクトンの多くなった状況を示しているのではないかと。
- ・ 今年の青潮は資料のとおりであるが、塩浜2丁目前面に関しては、青潮の被害よりも前に8.6以上のpHになっており、赤潮で傷められて、その上に青潮が来たので参ってしまったという感じである。
- ・ 来年の春には、昼間干出している可能性もあるので、調査でなくても良いが皆で見ることができるよう検討願いたい。
- ・ 委員だけではなくて、一般の人にも調査を見学できるような場を設けてほしい。また、県の生物多様性センターの職員も立ち会えるよう検討願いたい。(会場意見)

【委員長のまとめ】

- ・ イベント時の前後が把握できるように、3ヵ月という調査頻度にはあまりこだわ

らず、年4回を有効に活用するということを検討願いたい。

- ・ 材質と高さが同じところについてどういう生物が入っているのか、既存の調査結果でも構わないので情報を集められたらいいのではないか。
- ・ pH、DOについての相関があるのかどうか、そういったものが計れるように違った季節について調査をしたほうが良いというサジェスションがあった。
- ・ 春の大潮のときに現場を直接見ることができるよう検討願いたい。

(4) その他

ア 委員長から、陸地での自然再生について、市川市との調整状況等現況についての確認があり、事務局から現況について説明があった。

(主な意見等)

- ・ ワークショップ時に説明があった内容について、変更する予定はないという考えを10月に市川市に確認しており、今のところはそれ以上は進んでいないという状況である。(事務局)
- ・ 自然環境学習施設等については、平成20年6月にこの実現化試験計画等検討委員会からの要望を受けて、市川市の庁内合意を図って絵を出しており、それ以降、その考え方を進めるということになっている。(市川市)
- ・ 市川市が所有の土地であるので地元の希望は最優先すべきものではあるが、ここに三番瀬の再生の目玉になるようなものを作ろうということになると市川市の単独の事業ではなく、国や県の予算もないとできないと思われることから、市の希望に加えて「三番瀬の再生」という大きな目的の中でより魅力のあるものができるかどうかという柔軟な検討もお願いしたい。(委員長)

イ 事務局から、現体制での検討委員会の開催は、本日が最後になる旨報告を行った。